



# 火山の歌

丸山健二

新潮社版

か ざん うた  
火山の歌

● 著者 まるやまけんじ 丸山健二 ● 発行者 佐藤亮一  
● 印刷所 二光印刷株式会社 ● 製本所  
新宿加藤製本 ● 発行所 株式会社新潮社  
郵便番号 162 東京都新宿区矢来町71  
電話 業務部 東京(03)266-5111 編集部  
東京(03)266-5411 振替 東京 4-808 番  
昭和51年4月15日印刷 昭和51年4月20日発行  
定価 980 円

© Kenji Maruyama Printed in Japan 1976

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
ください。送料小社負担にてお取替いたします。

火山の歌



☆

甲高い爆発音と、ものすごい埃をまき散らして、観光道路を風のように突っ走って行く「ヨシ」の姿に注意を払わない者はいなかった。通りがかりの犬や猫までが振り返って見るほどだった。

彼に気がついた百姓たちは、ひとり残らず土くれをかきまわす仕事を中断し、大口を開けていつまでも見送っていた。そして、完全に視界から消えてしまうと今度は、印象が薄れないうちに大急ぎで、その若者の風変わりな点について感想を交換し合うのだった。

それはまったく奇妙ないでたちだった。青々と光る坊主刈りの頭、銀色のサングラス、カラス天狗の嘴そっくりな黒い防塵マスク、白いジーパンに白いランニングシャツ。しかも彼の両脚がはさみつけているのは、決して排気量の大きなオートバイなどではなく、女たちが家の近くを乗り

まわすような、自転車に毛が生えたような、華奢なバイクだった。おまけに車体の色は真っ赤で、あちこちにテントウ虫のワッペンが貼ってあり、ハンドルの前には買物かごまでついていた。

けれどもそのバイクについてはヨシの好みといえなかった。もっとましな、高い山をたてつづけに越えてもびくともしないオートバイを手に入れるのに必要な時間がなかったのだ。キーを差しこんだまま置いてあったのはその一台だけだったのだ。

しかし、見かけによらずエンジンの調子は上々だった。また、ガソリン・タンクも意外に大きく、出発のときには半分の量だったが、すでに二時間も走りつづけていた。

ヨシにしてみれば大旅行だった。それほど遠くまで足をのばしたのはここ何年間もなかったことだった。きのうの午後、ガレージの上にある蒸し風呂よりも暑い木造アパートを、彼は出た。まず急行列車に、ついで客車と貨車とが連結された列車に乗り継ぎ、それから今朝早くバスに乗りうつしたのだ。

ところが、そっちへ行くどのバスの扉にも、急運転休止の貼り紙があつた。そのちよつとした噴火のために、タクシーの運転手までが尻ごみをするありさまで、国道まで行ってみても南へ向う自動車は一台もなかった。

だが、ヨシはどうしても行かなければいけないと思ったのだ。引き返そうなどとは考えなかった。

どこでも噴火の話でもちぎりだった。人々は皆空を見あげて何事か話し合っていたが、深刻な表情ではなかった。かれらを真似て、ヨシも何度か空を見た。しかし、はるか遠くの大気がいくらか濁っている程度で、ほかに別けにどうというともなかった。

そこまで歩いて行くにはあまりにも遠すぎた。いくらか血の巡りのわるいヨシ——たしかに同じ年頃の若者に比べたら思慮深いほうではなく、むしろ知恵遅れの仲間に入れてもよさそうだったが、家を出てからずっと彼は誰の力も借りないで生きてきた——にも、飲まず食わずで歩きつづけて丸一日はかかることくらいわかった。だから彼は小さな町をさんざんうろつきまわって、自転車よりもましな乗り物をようやく手に入れたのだ。かつて半年間ほどラーメン屋の出前をしていたことがあったので、バイクの運転には慣れていた。

ヨシはひたすら走りつづけた。赤いバイクにまたがって、初夏の午さがりのなかを、見知らぬ風景のなかを、がむしやりに横切って行った。観光道路へ入ってからは、もはや誰かをつかまえて道をたずねる必要はなくなった。行手には絶えず濁った大気が渦を巻いていたのだから。

自動車はむろん、ハイカーさえも通らなかった。従っていまやヨシひとりのための道路といってもよかった。路面にはうつつらと灰が積っていて、バイクが通過すると同時にそれが空中高く舞いあがり、彼の存在を一層目立つものにさせた。

やがて田んぼや畑にかわって、道の両側を白樺の林がはさんだ。そこには静寂とひんやりした空気が満ちていた。すべての物音はヨシが立てているのであって、彼の前方はしんと静まり返っており、彼の背後もまた深い沈黙を守っていた。すでに彼に注がれる視線はひとつもなかった。

ひどく急な坂道にさしかかってバイクは喘ぎはじめ、ヨシは慌ててギヤをローに変えたが間に合わず、みるみるうちに速度が落ちたかと思うと、遂にはエンジンがとまってしまった。そうなるにあとはバイクを押して、曲りくねった長い坂道をのぼるよりほかに方法はなかった。エンジンの音がやむと彼は、耳の奥にたまっていた軽い疲労が失せて、体全体がいくらか軽くなったような気がした。喉はカラカラに渴いていた。彼は耳を澄まして、水の音を捜したが、聞えてくるのは、木々のあいだをゆっくりと柔らかく通り抜けて行く風の音ばかりだった。

坂道のをぼりつめたらふたたびバイクを走らせるつもりでいたにもかかわらず、いざそこまでくると、ひと休みせ

ずにはいられなくなつた。

ヨシは草むらにそつと倒したバイクの隣りに、膝を抱くようにして、深々としゃがみこんだ。喉の渇きもひどかつたが、空腹もかなりのものだった。やがて彼は、しゃがむ姿勢から仰むけになつた。ときどき頭を左から右へ強く振るのは、髪を長くしていたときの癖だった。きのうの午前中までは、彼の髪は肩のところまでであつたのだ。

そうやって頭を振るたびにヨシは、つるりと頭を撫でまわし、急におそろしく真面目な顔つきをし、つづいて病人のような暗いため息をもらした。

そのため息は緊張によるものだった。またとない好機——今度の仕事を与えてくれた男がそう言つたのだ——を前にして、ヨシはとても緊張していた。だから、それほど広い林なのに鳥が一羽もないことに気がついたのはずつとあとになつてからだった。さえずりや羽音がまったく聞えないばかりか、気配すら感じられなかつた。

だが、ヨシの関心はすぐさま別の件に移つて行つた。寝そべつたまま彼は右手を買物かごに突っこむと、ビニール製の黒い書類ケースをつかみだした。いつ棄つてもおかしくないほど古ぼけた品で、こわれたチャックは三分の二しか開閉できず、傾けるだけで中味がこぼれ落ちそうになつた。

ヨシはそれを強く振つた。ころがり出たのは一冊の時刻表だったが、なかには数枚の紙幣と、一枚の写真がはさまれてあつた。彼はまず札を何回も数え直してから、しげしげと写真を見つめた。

平凡な写真だった。写っているのは男と女で、ふたりは公園かどこかの噴水の前で肩を寄せ合つて、幸福といえは幸福な、不幸といえは不幸な、不思議なほほ笑みを浮かべていた。ただそれだけの写真であつた。

男が着ている背広は型がくずれはじめており、女は水玉模様のワンピースを着て、やはり同じ柄のハンドバッグを抱えこんでいた。噴水ばかりがいやに目立つ、ただそれだけの写真であつた。

写真と札を時刻表にはさみ、時刻表をケースにしまい、ケースを買物かごに放りこむと、ヨシはむっくりと起きあがつて、バイクにまたがった。バイクを手に入れた町で買った防塵マスクで口と鼻を、また銀色のサングラスで眼を覆い、クラッチを切つたままゆっくりと坂道を下つて行つた。そして平坦な道へ出る直前にクラッチを接続させて、エンジンをかけた。

以後、バイクを押して歩かなければならないような坂道はなかつた。しばしばサイドミラーに顔を映してみる余裕が生じるほどカーブの数も減つた。



ヨシの長い髪に鉢を入れるとき、理容師は念を押した。本気なのか、と訊き直した。ヨシは答えた。大きな仕事をやる前には短くするもんだ、と繰返した。しかしそれは、今度の仕事を彼に与えた男からの受け売りの言葉だった。つまりヨシはからかわれたのだ。丸坊主になった自分の頭を見て、ヨシは呟いた。これで何もかもうまくゆく、と。

ヨシは走りつづけた。

時間は夕方に近づいていたが、光はまだ真昼と大差なかった。広々とした立派な観光道路は、相変らず彼ひとりのためにあった。

白樺の林がいきなり終って、ヨシは突然だだっ広い空間に放り出された。彼の眼が見たのは、大量の光と、大量の岩だった。そうした眺めに慣れるまでのあいだ、赤いバイクは道路の端から端までをいっばいに使って、フラフラしながら走った。強い硫黄の臭いにも慣れなければならなかった。

見渡すかぎり黒ずんだ岩が散らばっていて、その岩と岩のあいだをススキが埋めていた。バイクが舞いあがる灰は更にもものすごくなって、ちよつとした竜巻きほどになった。いつしかヨシは道路から外れたところを走っており、空想癖が頭をもたげはじめていた。彼には不慣れな事態を迎えたとき、必要以上に大げさに考えて愉しむ癖があったの

だ。砂地に車輪がめりこんで転倒しそうになった瞬間からそれがはじまった。海よりも広い土地に違いないと彼は考えた。そして、転倒は沈没のような取り返しのできない失敗につながると思った。だから彼の恐怖は信じられないほどふくれあがってしまった。

けれどもヨシは前進をやめなかった。両脚でしっかりとタンクをばさみつけ、巧みにバランスを保ち、アクセルを全開にして、防塵マスクのなかで悪態をつきながら、勇敢に突き進んだ。走っても走っても、周囲の景色は一向に変らなかつた。表面が無数の穴で覆われている黒ずんだ岩、ススキ、火山灰。しまいに本当か前進しているのかどうかも怪しく思えてくるのだった。

観光道路から外れたことをヨシは後悔した。またしてもエンジンがとまってしまった。だが今度は道のせいではなく、ガソリンが切れたためだった。

舌打ちをしてバイクをおいたヨシは、自分がとてつもなく広い、岩とススキと灰しかない土地の真ん中に投げ出されていることに初めて気がついた。次に彼が見たのは、全体が紫色をした大きな山だった。頂から煙を立ち昇らせている山だった。

その山はいま、巨大な影で麓を覆っていた。

その山はいま、噴煙でいくらか太陽の光を弱めていた。

その山はいま、ほとんど聞きとれないほどの低い唸り声をあげていた。

☆

溶岩原の真つただ中をバイクを押して進むヨシは、そのとき初めて火山の音を聞いた。音というより鈍い震動に近く、地の底から沸きあがってくるエネルギーの震えであった。

ヨシはまた海を思い出した。竹竿のように細長い半島の突端に立ったとき、彼をとりまく世界はまさしく凹形であり、そこでもやはり低い周波数の音に包みこまれたのだ。波は山の湖よりも穏やかで、前髪を動かす程度の風も吹いていなかったのに、海はたしかに唸っていたのだ。

そしていま、ヨシの前に立ちほだかって、台形の大きな影を落している紫の山が、けもののように唸っていた。彼はぶつくさどひとり言を呟きながら、山頂付近に漂っている白っぽい噴煙をまじまじと見ていた。

太陽は依然ひどく傾いていたが、それでもまだかなり強い光を降らせつづけていた。ヨシの額には汗の玉がびっしりと浮かびあがっていた。

ヨシは音をあげなかった。靴のなかは灰でいっぱいだったし、腹も減っていたし、喉も渇いていたけれど、歩調は乱れなかった。長い髪が切られた瞬間に、自分はいくらか変わったのかもしれない、と彼は思った。髪が無くなったかわりに、新しい何かの力が身についたのではないかと、本気で思ったものだった。少なくとも彼は、きのうの午後からたったの一度もためらいをみせていなかった。真つしぐらに目的の土地へ向った。

相当な道程を進んだと体で感じられる頃、ヨシは顔をあげた。しかし、そこにあるのは相変らずの眺めだった。岩と、ススキと、灰……いや、空色のペンキを塗った高圧線の鉄塔が、そして更に眼を凝らすと何本かの電柱が見てとれた。

そのとき突風が吹いてきて、いまままで淀んでいた硫黄の臭いが一斉に移動を開始した。ススキが同じ方向へなびいて揺れた。だが、ヨシにとつて都合のいい風とはいえない。涼しくないどころか、むしろ熱風と呼んでもかまわないほどで、彼はますます汗にまみれた。おまけに溶岩原のあちこちに相次いで小さな旋風が発生したかと思うと、舞いあがった灰のために大気はすっかり濁ってしまった。紫の山までがたちまちかすんでいたのだ。

ヨシの姿もかすんだ。風は更に強まった。ヨシは動かな

いで、風がやむのを待った。しかしいつまで待っても大気は透明にならず、やむなく彼は、岩のないところが道ではないかと思当をつけて、ふたたび歩き出した。ところがいくらも進まないうちに、ちよつとした小屋ほどもある大きな岩に囲まれて、身動きがとれなくなった。

それはヨシの空想癖がもたらした産物ではなかった。彼は同じ場所を幾度も幾度も歩きまわった。諦めるには早いと悟ったのは、それからしばらく経ってからだった。彼は足元ばかりを見て、視線をあげるのをすっかり忘れていたのだ。

ヨシは頭上で突風に煽られている電線に気がついた。はげしく波打っている電線に沿って進めば、いつかはきっと人家にぶつかるとは思はずだった。彼にしては上出来のひらめきだったが、その考えは半分正しく、半分間違っていた。たまたま南へ向ったからよかつたものの、もし北へでも行つたなら、最初の人家が見えるまでにはまる一日かかつたであらう。

薄茶色に染まつた大気の向う側に、岩とは明らかに異なつた形の物体を、ヨシは発見した。それにははつきり與人間の気配が感じられた。彼は足を速めた。するとブロック塀に三方を囲まれた低い建物が、ついで石油会社の大きな看板が見えた。

ガソリン・スタンドだった。前には立派な道路——何のことはない、それはさつきまでヨシがバイクで走っていた観光道路のつづきだった——が通っていた。

事務所の方から、若い女の鼻歌が聞えてきて、ヨシをとてもし気分がさめた。彼は異性のそうした種類の声が大好きだったのだ。バイクを両手で支えたまま、彼は誰かが外へ出てきてくれるのを待った。できれば鼻歌の主にきてもらいたかつた。

高いブロック塀のためにそこでは風の影響が少なく、眼を開けていることができた。客がきたことを知らせようと、ヨシはホーンを鳴らした。二度、三度とたてつづけにボタンを押した。

やがてガラスの扉が開いて、ひとりの娘が風のなかへ現われた。鼻歌をつづけながら彼女は、ヨシを真つすぐに見つめて近づいて行つた。ヨシもまた、舌の先でガムを器用なところがしている娘の顔から眼をはなさなかつた。娘がすぐ傍までくると、彼はタンクのキャップをはずして、一杯にしてくれと言つた。そう言つてから、バトン・ガールみたいななりをしているじゃないか、と胸のうちで呟いた。

だが実際には、そのへんの国道沿いのガソリン・スタンドで働いている娘たちの制服と似たり寄つたりだつた。仮装行列の扮装のようにけばけばしく見えたのは、場所のせ

いに違ひなかつた。もつともヨシの恰好にしても同じようなものだった。

娘は灰が混入しないようにタンクの口を掌で覆つて、ガソリンを注いだ。

しばらくのあいだふたりは無言で、互いの顔を見つめ合っていた。娘はヨシにぶしつけな眼ざしを浴びせていたが、決して物珍しそうな顔つきはしなかつた。彼女が腰に巻きつけている丈の短いスカート——それはブロック塀のなかへ突風が吹きこむたびにはねあげられて、太股がむき出しになるのだった——の縁どりの赤と、口紅の色はそっくり同じだった。

娘は無表情だった。唇には皮肉な笑みも浮かんでいなくつたし、どぎつくアイシャドウを塗った眼もごく自然なまばたきを繰返していた。

ヨシは訊いてみた。どうして驚かないのか、と。自分を初めて見る者は大抵びっくりするの。

娘は鼻歌をつづけ、返事をしなかつた。風のせいでうまく相手の耳に伝わらなかつたのではないかと心配になったヨシは、もう一度訊いた。

「そりやもうびっくりしたわよ」と娘は答えたが、相変らず平然としていた。というより、ヨシの頭の程度を見抜いて、まともに答えるのがばからしくなつたのだ。彼女はメ

ーターを読み、ひどく事務的な口調で料金を言い、ヨシの鼻っ面にグイと右手を突き出した。

ヨシは買物かごから書類ケースをとり出そうとしたが、娘の視線が急にまぶしくなつて後を向いた。しかし娘は彼の前にまわつて、時刻表をしげしげと見た。するとヨシは、風に吹き飛ばされてはいけなからという口実をもうけて、今度はブロック塀の隅っこまで行き、素早く紙幣を一枚抜きとつた。

事務所へとつて返した娘は、まもなく釣り銭を持ってふたたびヨシの前に現われた。そのときにはすでに彼女の表情は一変していた。とり澄ましたような、小ばかにしたようなところ失せ、しかもたくさんの質問を矢つぎ早にたたきつけた。

——なぜお金をそんなものにはさむの？

——なぜ髪を切つたの？

——なぜもつと大きなオートバイにしないの？

——なぜここへきたの？

ヨシはどの質問にも答えなかつたが、しかし精いっぱい愛想笑いは絶やさなかつた。今度質問するのは彼の番だった。あの山は本当に噴火するのか。

娘は横柄な口ぶりで言つた。きのうもきょうも噴火はあつた。このところほとんど毎日ある。ヨシは更に訊いた。

危いではないか。逃げ出さなくていいのか。

「逃げたいひとは逃げ出せばいいのよねえ」娘は赤いバイクのまわりをゆっくりと一周してから、とうとうサドルにまたがってハンドルを握った。「これあたしなんかにも乗れないかしら。どうやってエンジンかけるの？」

ヨシは少し嬉しくなって、どこをキックすればいいのかわえた。娘はその通りにしたが、電源スイッチが切つてあるので、エンジンが始動しなかった。諦めた娘はバイクから離れると、またしても態度を大きく変えた。口のきき方が一段とくだけた。ただの客から知人、知人から友人へと。だからヨシが喉が渴いたと言もらしただけで、彼女は事務所へ案内した。

背後で重いガラスの扉が閉まると、途端に風の音が消えた。窓の向う側では、薄茶色の大気がのたうちまわって、赤いバイクがひっきりなしに揺れているというのに、事務所の中は静まり返っていた。

まずヨシが見たのは、骨董品に近いような旧式のレジスタターだった。ついで彼は、娘のほかに誰かいないかどうかを確かめようとした。しかしそこにいるのは、ヨシと娘のふたりきりだった。

部屋は細長く、棚には罐入りのオイルやらカー・アクセサリーやらが並べられ、そして壁には、空高く黒煙を噴き

あげている山の観光用ボスターが貼つてあつた。床の上にはテーブルと椅子。

ヨシは訊いてみた。若い女がたったひとりで店番するのは不用心ではないか。女がひとりであるのを見かけると、彼はかならずそうたずねるのだった。

「ひとりじゃないわよ」娘はアイスポックスのなかへ深々と右手をさし入れて、罐入りジュースをとり出した。自分にくれたと思つたヨシがそれをつかむと、彼女はまた金を請求する手つきをした。ヨシがそれを返そうとすると、彼女はこう言つた。

「このあたりの水なんてとてもじゃないけど飲めないわよ。いまは特にひどいから。ジュースが安全よ」

やむなくヨシはさっきの釣り銭でジュースを買い、一気に飲み干した。それから娘がすすめてくれた椅子にどつかと腰をおろし、思いきり手足を伸ばしてから、もう一本ジュースを買い、ジュースを飲むのとタバコをふかすのを交互にやつた。

窓の外へ顔を向けたままヨシは、ほかに誰がいるのかとたずねた。娘はわざとしかめっ面をして、囁くような低い声で、奥の部屋に父親がいると言つた。つづいて、その父親についての短い説明をした。

「体が大きくてね。あんたの倍はあるわ」

「嘘だ」とヨシは言ってみたが、すでに彼の頭のなかには、水牛か何かの皮を腰に巻きつけた巨人のイメージがふくらみつつあった。

ふたりは、小さなテーブルをはさんで坐って、しばらくのあいだ口をきかず、互いの顔を眺めていた。ヨシは半信半疑の状態だった。きのうの午後ガレージの上のアパートを出たときからの出来事が、本当にあったこととはどうしても思えなかった。紫の山、薄茶色の大気、とりわけ真正面にいる娘などは特に信じられなかった。すべてが夢心地だった。

いま娘の眼は、日焼けした顔のほほ中央に黒々と輝いて、真つすぐにヨシを見つめていた。ヨシは視線を窓の外へ転じた。

風は一段と強まり、大気の色はますます濃くなり、わずかに数メートル先の赤いバイクでさえも識別できなくなってきた。

「もしもさあ」とヨシはふいに言った。もしも自分がレジスターの金をつかんで逃げ出すような男だったら、どうするつもりか。

彼はそう言うのと、一応それらしい顔つきをして、すぐんでみせた。つまり、半ば腰を浮かして、レジスターを睨みつけたのだ。ところが娘は落着き払っていた。にこやかな

笑みを投げかけて、ゆったりと椅子に坐っていた。やがて彼女は言った。

「あなたにはやれないわね。第一やっても無駄よ。うちにはもうお金がないんだから」

噴火騒ぎで客の数が減つたために、レジスターは空っぽだ、と彼女は言うのだった。言ってから、忍び笑いをした。真面目くさった顔つきでヨシは、二本目のタバコに火をつけ、左手に持っていた時刻表を開いて例の写真をとり出し、そっとテーブルに置いた。娘は身を乗りだした。彼女の体の匂いがヨシに近づいた。

だいぶ長い沈黙の後、ヨシは頼んだ。この写真に写っているふたりの人間を知っていたら教えてくれないか。

彼はつづけた。古い写真だから、そっくりというわけにはゆかないが。

すると娘は、その写真を奪い取るようにしてひったくり、奥の部屋へ入って行った。ややあって男の太い声が聞え、ヨシはまた皮の腰巻をした巨人を連想して、思わず立ちあがった。けれども現われたのは娘ひとりだった。

「知らないって」彼女は二本の指でつまんだ写真をヨシの前に突きだした。「見たこともないってよ」

娘の様子を注意深く観察したあと、ヨシは少しがっかりして、ため息をついた。娘は、眼には見えないほどの隙間

から入りこんできた火山灰を、モップを使って丹念に拭きとっていた。

ヨシは写真を時刻表にはさみ、書類ケースにしまいこんだ。

突然娘が振り返って言った。

「父さんが言うにはねえ、もしかしたらホテルにでも泊っているんじゃないかって」

ヨシはふたたび元気になり、ホテルまでの道を教えてもらうと、慌てふためいて風のなかへ出て行った。防塵マスクをつけ、サングラスをかけて、バイクにまたがった。娘が事務所から飛び出してきて、訊いた。

「そのふたりがどうかしたの？」

ヨシは風の音とエンジンの音で聞えないといったふりをした。すると娘は更に近づいてきて、大声で言った。

「父さんはねえ町へ買物に行ってしまうから、あしたの午前中はあたしひとりなのよお！」

しかしヨシはまた聞えないふりをして、観光道路を北へ向った。

☆

濁った風のなかを五分ほど走ると、ガソリン・スタンドの娘が教えてくれた通りの白い建物で、右手に見えてきた。それから別の道を五分ばかり走ると、《馬》という名のホテルに着いた。

玄関へまわったヨシは、バイクをどこに置けば盗まれないだろうかと考えて、しばらくあちこちうろつきまわった。だが、人の気配は感じられなかった。客の姿も従業員の姿も見えなかった。わからないことだらけだった。茶色い大気のために、一体ホテルがどんな場所にあるのか、どんな庭に囲まれているのか、どんな形の建物なのか、さっぱり見当がつかなかった。

比較的風当りが弱そうな玄関の脇にバイクを停めたヨシは、書類ケースを大切に抱えて、回転扉のなかへ入って行った。サングラスと防塵マスクをはずし、頭や肩についた埃を払って、フロントへ声をかけた。そこには玄関の外にもあったのと同じ形の大きな馬の石像が飾っており、また、よく見ると壁のいたるところに金色の馬蹄が打ちつけてあった。

フロントもロビーも空っぽだった。呼び鈴のようなものはないかと捜してみたが、どこにも見あたらないので、ヨシは大声を張りあげた。その声は建物の奥へ奥へと吸いこまれて行ったが、返事も足音も聞えてこなかった。

そこでヨシはロビーの長椅子で待つことに決めた。長椅子にも、床にも、本物の三倍はあろうかと思われる白馬の像にも、うつすらと灰が付着していた。

外はすでに暗くなりかけていて、気温もいくらか下ったようだった。

ヨシはまた大声を出した。やはり現われる者はなかった。ついで彼は傍らのジュークボックスに小銭を放りこんだ。外の風の音にも負けないくらい幅の広い音のかたまりが、どっとスピーカーから溢れ出て、一瞬のうちにホテル全体の空気を震わせた。

しかし、それでも現われなかった。長椅子に寝そべったヨシは、白馬のおそろしく長い顔を見あげながら、はげしいリズムに疲れた体を委ねた。その音楽はドラを効果的に使っていて、「ガーン」と一発打ち鳴らされるたびに、ジュークボックスの上に置かれた花瓶が軽くはね、ヨシは興奮した。彼はいま白馬の背にまたがって、まる一日かかった旅を数分間でやり直そうとしていた。急行列車より速く、もちろんバイクより速く。

ところがやがてヨシは急に疲労を覚えた。旅の疲れが背中一面に拡がったかと思うと、たちまち深い眠りにひきずりこまれた。傍らでは電気楽器やら打楽器やらが入り乱れていたのに、彼の意識は急速に遠のいて、遂にはすべてを

忘れてしまふ世界へと潜りこんだのだ。

しかし、そうやって眠っているあいだ、ヨシはとて不辛だった。なぜなら、片方の翼だけでも一メートルもあるような黒い怪鳥が夜空を飛び交う、いつもの重苦しい夢を見ていたのだから。

眼をさましたヨシは、まだそのへんを飛んでいる黒い怪鳥を追い払っているうちに、自分がなぜそんなところにいるのかを少しづつ少しづつ思い出して行った。できることなら彼はガレージの上のアバートで眼をさましたかったのだ。

夜になっていた。

灯りが点いていた。白馬の像は青い照明を浴びてロビーの中央に浮かびあがっており、その姿はまるで宙を駆けているように見えるのだった。

そしてフロントには、蝶ネクタイをつけた長身の男が棒のように立っていた。彼はただ立っているのではなく、眼鏡をかけたボーイと話をしていたが、唇しか動かさなかった。ので、喋っているようにとはとも見えなかった。しかも彼は、近づいてくるヨシに気がついても別段驚いた素振りを見せなかった。おそらく彼は、ヨシが長椅子で眠っているところをたっぷりと見たのだろう。

蝶ネクタイの男は、いきなり自分は支配人であると名乗



り、ばか丁寧に頭をさげ、それから、「よくきてくれました」と言った。また、ヨシがまだ一言も口をきいていないのに、こうも言った。山がこんな状態だから、ろくなもてなしができない。大半のボーイやコックたちが恐がって出て行ってしまった。その分だけ宿泊費を安くしたい。

バイクをどこへ置けばいいのか、とヨシはたずねた。すると傍らに立っていたボーイが、駐車場へ入れておきました、と答え、くすつと笑った。

「で、ご予約は？」と支配人は訊いた。

ヨシは、支配人の背が高いのは竹馬のようなものを足にくくりつけているのではないかと考え、覗きこもうとした。「で、ご予約は？」と支配人は重ねて訊いた。

ヨシはしばらく迷ってから、一晩だけでいい、と答えた。「うちは前金でいただくことになっていきますので」支配人は馬によく似た長い顔を上下に振って、言った。「これにご住所とお名前を……」

ヨシは時刻表を開いて札をとり出し、支配人が釣り銭を用意しているあいだ、住所はひらがなと数字で、名前だけを漢字で書いた。ボーイがまたくすつと笑った。

ボーイのあとについて、ヨシは螺旋階段を上って行った。踊り場ごとに小さな白馬の像があり、壁には金色の馬蹄が打ちつけてあった。

ヨシが口笛を吹くと、ボーイがきつとなくなってこんなことを言った。

「うちはもともときちんとした身なりの客しか泊められないですよ。それはランニングシャツでしょ？」

だが、それほど明確なあてこすりさえもヨシにはまったく通じなかった。

三階へ行くまでのあいだにほかの客には会わなかった。声も聞えなかった。ボーイは三階の部屋を片っ端に開けて行き、窓ガラスが割れていない部屋を見つけると、まるで荷物でも放りこむようにしてヨシを入れた。帰ろうとするボーイをつかまえて、ヨシは訊いた。窓が割れているのはどうしたわけか。ボーイは面倒くさそうに説明した。灰のほかにも石が飛んでくるのだ。ついでにボーイは、食事は二階の食堂でしてくれとか、メニューは一種類しかないとか、入浴はシャワーだけにしてくれとか、あれこれと注文をつけ、廊下へ出てからまたひき返してきて、芝居つけたぷりに言った。

「でかい噴火があったらみんな丸焼けだ」

ボーイの足音が階下へ消えると、ヨシはベッドに腰をおろして、「ドカーン」と叫んだ。ついで素っ裸になって浴室へ駆けこみ、冷たいシャワーのなかに長いこと立っていた。ガソリン・スタンドの娘の言葉は正しかった。シャ